香川教育

発行所
高松市田村町1033-3
TEL(087)867-4797
FAX(087)867-6446
香川県教職員組合
定価 1部50円　1月100円
組合員の購読料は組合費に含む

香教組ホームページ
http://kakyoso.com/

書記局閉鎖のお知らせ
夏季休業
8/12（金）
8/15（月）
8/16（火）
全国書記局会議参加のため
8/25(木)
8/26(金)

香教組教育講座　寄宿舎全国大会学習会

人間を大切にするしごと
ー能力主義的生存競争と障害のある子どもたちー

6月12日（日）高松テルサで春の教育講座と全国寄宿舎学習交流集会学習会を合同で開催しました。鳥取大学教授　三木裕和さんをお迎えし、競争的環境の中で発達障害のある子どもたちが感じている生きづらさや教師も感じている生きづらさについて、その

具体例をもとに講演される三木先生

あちこちで見かけるよく似た人たち

「おびえていて自己防衛的、攻撃的な人」を近年よく見かけるようになりました。これらは、発達障害の二次障害の結果です。現代社会はこのような人たちを作りだす構造をもっているのではないかと思います。

能力主義的生存競争、貧困、虐待、教育における「荒廃」

学校現場では、「障害特性を踏まえた指導」が必ずしもうまくいくとは限らなくなってきています。指導手法にも問題があると考えられますが、一番の問題は、教育目標が大人の側にあって、子どもの要求に基づいたものではないことがうまくいかない原因なのです。

発達主体としてとらえる

「迫害」「虐待」などを受けた子どもの共通点は、「安全感の欠如」「自分は罪深い存在だという意識」「パワー幻想」などがあります。彼らは、「攻撃を避けることができない」「圧倒的パワーへの抵抗が無力」「自分のことを自分で決められない」「コントロールできない」「無気力」「課題に向き合おうとしない」といった形で表出されます。これらを「無力感」と呼びます。

しかし、この「無力感」からの離脱をはかることによってこれらの行動は改善されていきます。「無力感」の離脱のためには、「何かを成し遂げる経験」が大切です。大人から見ると、ささやかで、幼稚で、未熟であっても、本人からすれば大きな出来事なのです。それを、信頼できる大人が認め、ともに喜ぶことで、「この世界で生きていける」「自分の生きている世界が安全なものだ」と思えるようになるのです。

向き合ってくれる大人の存在

「向き合ってくれる大人」の存在がとても大切です。例えば、①本人にとって「見捨てられない経験」②周りの友だちにとって「いじめてもいい存在」ではなくなる③親にとって、自分の子どもを「かわいい」と言ってくれる存在、つまり見捨てない大人（親・教師）が存在することで二次障害への移行を防げるケースが多いのです。

「行動障害」の強い生徒の実践記録を見ると、実は、担任が参っていることが多いように思います。教師に（親に）「個人責任」を求めるとたいがいうまくいっていません。個別指導体制ではなく、事例検討会をし、みんなで考えることが大切です。すぐに解決策は見えなくても、話し合うだけで事態が少し良くなることはしばしばあります。

何のための教育なんだろう

今一度、教育目標や教育評価論から考える必要があります。「療育プログラム」が裏目にでたケースもあります。

弱い人が集まるところが組合

個別指導体制で教育効果が上がる時代ではないと思います。小さな力を集め、みんなで考え話し合い子どもたちを育んでいくことがこれからの時代大切です。そういう意味でも、組合は大切です。みなさん、がんばってください。

※以上は講演内容の抜粋です。詳しい内容が知りたい方は、香教組（０８７-８６７-４７９７またはkakyoso@kakyoso.com）までお問合せください。

青年部　エデュカフェのご案内

テーマ「しゃべって　しゃべりまくろう！」
私の悩みはみんなの悩み
私の喜びはみんなの喜び
・日時　7月23日（土）15:00～
・場所　香教組会館　２F会議室

組合員も組合員でない方も参加できます。
みなさんの参加をお待ちしています。

※　終了後、高松市内で懇親会も予定しています。
詳しくは香教組本部　℡087-867-4797
kakyoso@kakyoso.com まで

小黒板

職場訪問での話。授業時間数が増え、低学年でも5時間目、6時間目が増えた。放課後、気が付くと4時半近くになっているという。小学校の話▼中学校は、部活最盛期、日暮れも遅いので、かなり長い時間練習している▼小学校の話に戻る。放課後の時間が足りないので、勤務時間終了時刻から職員会議や現職教育が入る学校が増えていると聞く▼保育園のお迎えや親の介護で早く帰らなければならないのにお構いなしだそうだ。たまりかねた人が、管理職に訴えたところ「帰りたかったら帰ってください」と返答▼言葉の真意は分からないが、そこで「はい、では帰ります」とは帰れない。確かに、時間外勤務を命じる「限定4項目」の中に「職員会議」はある。しかし「緊急かつやむをえない場合」だけだ▼風通しのよい職場のために「職員会議」は必要だ。教職員の資質向上のために現職教育も必要かもしれない▼そうは言っても、法とその趣旨を無視して時間外にまでやってはいけないだろう。県教委は「長時間過密労働の解消や夏休みのリフレッシュのために努力している。評価して欲しい」と言っている。しかし、その努力が現場まで届いていないような気がする▼ある職場で「職員会議延長分の割振り」の話をしたら「教員調整額４％のうちだから割振りは認められない」と管理職▼う～ん！この言い分間違ってますけど。

う～ん！

そうだ！

全教「未来をひらくプロジェクト」ゆいま～る沖縄集会

沖縄へ行こう！

日時2016年12月24日（土）～26日（月）

全教の集会は24日、25日。26日は香教組独自の企画。

会場　沖縄県国頭群恩納村
　　リザンシパークホテル谷茶ベイ

24日（土）15:00～

講演とトーク「沖縄から憲法を考える」
　講師　三上智恵さん（ジャーナリスト映画監督）
夕食交流会

25日（日）フィールドワーク

1　基地問題について
- ①　東村高江→瀬嵩の浜→キャンプシュワブゲート前
- ②　瀬嵩の浜→キャンプシュワブゲート前→北谷町役場→嘉数高台
- ③　読谷村→キャンプシュワブゲート前→嘉数高台
- ④　道の駅「かでな」→沖縄国際大学・佐真下公園→嘉数高台→対馬丸記念館
- ⑤　読谷村→道の駅「かでな」→
- ⑥　北谷町役場→道の駅「かでな」→沖縄国際大学・佐真下公園→嘉数高台

2　沖縄戦
- ⑦　糸数アブラチラガマ→ひめゆり平和祈念資料館→県立平和祈念資・平和の礎
- ⑧　南風原陸軍病院壕
- ⑨　不屈館/対馬丸記念館→南風原陸軍病院壕
- ⑩　ひめゆり平和祈念資料館→白梅の塔→轟壕→那覇市内で学習・交流
- ⑪　県立平和祈念資・平和の礎→南風原陸軍病院壕→那覇市内で学習・交流

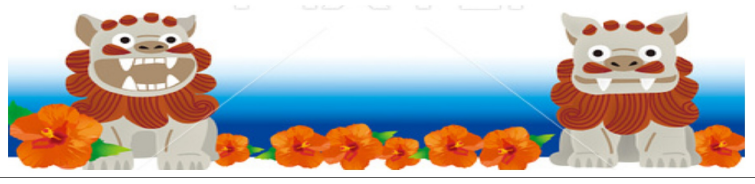
3ファミリー
- ①　嘉数高台→首里城→おきなわワールド・玉泉洞

参加費　組合員は17000円
**　　組合員でない方は60000円程度**

募集人員　青年を中心に先着20名（ご家族も行けます）

沖縄で憲法について見つめ直す
見て、聞いて、学んで、仲間とつながる２日間
沖縄の平和学習は「人生が変わる」とも言われています。
ぜひみんなで学び語りましょう！

お問合せ：香教組　濱田まで　087-867-4794
kakyoso@kakyoso.com



知っ得講座　いまさら聞けないけどよく知らないこと

教職調整額４％ってなあに？

戦後の公務員給与改革（1948年）
- ・教員の勤務時間は単純に測定することは困難
- ・教員給与が一般公務員より1割ほど有利だった

⇒　教員に対して超過勤務手当は支給されないと決定

その後、
　毎年の給与改定で教員の優位性が失われる
　超過勤務の実態が多くなる
多くの都道府県で時間外勤務手当支給を求める訴訟が提起され「超勤問題」として社会問題化

1966年　文科省→混乱収拾と教員の勤務状況把握のため、1年かけて全国的な勤務状況調査を実施

1968年　調査の結果を踏まえ義務教育諸学校の教員に対して、俸給の月額４％の教職員特別手当を支給する法案が閣議決定され国会に提出されたが廃案

1971年　2月人事院「教員の勤務態様の特殊性から、教職調整額を支給し、超過勤務手当を支給しない」を提言
5月給特法制定（教職調整額4%）1972年1月施行
1966年度の文部省の調査が規準

4%の根拠は？

＜1週間平均の超過勤務時間（1966年文部省調査）＞
小学校　１時間20分　中学校２時間30分　平均１時間48分
月８時間の超過勤務＝給与月額４％

勤務態様の特殊性として
教員には「限定４項目」を除き時間外勤務を命じてはならないことになっています。（つづく）

シリーズ「子どもとかかわる」⑧

子どもたちをコントロールする？

夏休み、ほっとできるひととき。夏休み前の4ヶ月を振り返ってみたいと思います。子どもたちが、「指示待ちで自発的に活動しない」「ガチャガチャしてなんとなく落ち着かない」そんな思いをもちながら夏休みを迎えた方も少なからずいると思います

どちらも、同じタイプの接し方が原因の場合があります。

①子どもたちが「やろう」と思った時、手順を事細かく指示。それ以外は認めない。

②作業過程の失敗を認めない。叱責する。

③作業の途中に、細かく次々指示する。

④子どもたちが作業完了時のイメージを持てないまま作業を始めさせる。

子どもたちの「やること」には失敗はつきものです。迷い道もたくさんあります。私たち大人は、たくさんの経験の中から効率的により良い方法を選択しようとします。そして、無意識にそれを子どもたちに求めてしまうのです。

ところが、思ったように子どもたちが反応しない、活動しないことに焦りを感じ、新たな指示を上乗せして出してしまいます。

そうすると、子どもたちはますます大混乱。「分からないから隣の子に聞く、そうすると、『私語しない』と注意される。」子どもたちは、納得いきません。徐々に、学級の雰囲気が雑然としたり、しらけてきたりします。

子どもたちは大人のミニチュアではありません。いろいろなことが初めての経験です。自分の関わり方を見直してみませんか？